



親鸞(四)

善鸞の巻

丹羽文雄



しん
親

らん
鸞 (四) 善鸞の巻

新潮文庫

に - 1 - 17



昭和五十六年十月二十五日 発行
昭和六十三年六月十五日 四刷

著 者 丹 羽 文 雄

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Fumio Niwa 1981 Printed in Japan

ISBN4-10-101717-4 C0193

新 潮 文 庫

親

鸞

(四) 善鸞の巻

丹 羽 文 雄 著

目次

京の日々	七
方便	四
宝治合戦	二二
親鸞の門弟	一五〇
明暗	一三
善鸞の悲劇	三七
自然法爾	三九
日蓮	三八

惠 晚

信

尼 年

.....
四三

.....
四三

解 說 大 河 内 昭 爾

親

鸞

(四)

善鸞の巻

京の日々

宇都宮頼綱は、この年（嘉祿元年一二三五）の五月、嵯峨中院邸に、藤原定家、同為家、同信実父子を招いて、連歌の会を催した。頼綱は蓮生と名のり、法然の弟子となっていたが、法然の死後は仏道一途にはげむというよりは、娑婆の人間としてのふるまいの方が多かった。定家とは姻戚関係でもあった。領地の宇都宮からの仕送りは豊かであり、六波羅探題でもたよりにされている人物であった。

定家は頼綱の囑によって、同邸の障子の色紙型に、天智天皇の御製をはじめ多くの歌人の和歌を書写して贈った。

親鸞が善鸞のために聖覚の「唯信鈔」の書写をはじめたのは、六月の中ごろであった。親鸞自身も教えているが、「唯信鈔」は親鸞が教えるよりも要領よく浄土宗なるものを伝えるからであった。

そのとき親鸞が使用した紙は、見聞集や涅槃經などを写した紙を裏返して使ったものであった。このころは、覚書程度のもものは、たいてい反古紙を用いた。

「これを暗記するほど、くりかえし読むがよい。疑問のところがあれば、どんなことでもよい、たとえその質問がどのように幼稚なことでもかまわない。訊ねるのだ。質問することを恥ずかし

いと思つてはならぬ」

と、親鸞はくどいほどにいった。

「日に何度もくりかえし拝読いたします」

「このつきには、隆寛房の『一念多念分別事』を書写して上げるから、それもあわせて熟読するがよい」

ある日、托鉢^{たくはつ}からかへった信蓮が、

「念仏宗と称して黒衣^{くろえ}の僧が京の町を歩いていることが、幕府の命によって禁止になるとの世間のもつぱらの評判でございます」

と、報告した。

「黒衣は、僧としては最下位の服装だが、それがいけないというのだろうか」

「六波羅探題から、それを禁止する宣旨^{せんじ}の再下を願ひ出たというのです」

京や鎌倉には、念仏宗が禁止になってからも、念仏宗と称して黒衣の僧が横行しているからであつた。黒衣が必ずしも念仏宗とはかぎらないのだが、黒衣は目につくからであつた。

「黒衣がいけないとなれば、柿色の法衣をきることになるのか」

親鸞は苦笑した。念仏宗弾圧がしつこくつづけられているのを、あらためて感じた。

「何を着ようと、念仏をわすれてはならぬ。町に出かけていくときには、注意するがよい。黒衣では工合が悪いというのなら、柿色にすればよい。いかに弾圧をうけようと、念仏はひとびとの心の内にしっかりと植えつけられているのだ」

京に、疱瘡はうそうが流行した。四条天皇までが罹病りびょうした。土御門つちのみかど院高倉殿は、疱瘡のために死亡した。三十一歳であつた。少将為氏、大納言実基、聖護院しょうごいん覚恵、藏人くらうど定雅、内大臣良実、定家の孫娘、駿河守重時の次男等、罹病者りびょうしやはかぞえきれないほどになった。上流貴族や武家が罹病するばかりではなかつた。

「病人の出た家の前は、とおらないことにしておりますが、いつも町に出かけていますので、どこでどう感染をするか、心細いかぎりです」

と、道性がいう。

罹病者の庶民は、たれも世話するものがなく、生きてゐる内から死者扱いであつた。ひとがやりつかなくなつた。幸いその病気がなおつても、あとの顔はみるもむざんな醜いものになつた。そういう顔を、親鸞しんらんは幾人かみていた。以前にも疱瘡が流行した。治療の方法がなく、ほとんどの病人が死んだ。猖獗しょうけつをきわめる一時期があるようであつた。それが終つて、自然に病人がすくなくなつていくのを、手をこまぬいてみてゐるよりほかはなかつた。病人がすくなくなるのは、どうやら季節の変り目のときのものであつた。

道家の女子が疱瘡にかかつたので、愛染明王あいせんみやうおう像一万体を造立して、十壇法を行なつたが、病気とは何の關係もなかつた。

將軍頼經も疱瘡を患つた。幕府は祭祓修法さいはいしゆほうを行い、祈禱きたうした。伊勢、石清水、賀茂社などに使者をたてて神楽かぐらを奉納させたが、病気には何のききめもなかつた。

「六波羅の武士が大勢、宇治の方面に向うのに出会いました」

その日、托鉢からかえってきた信蓮が話した。

奈良の興福寺の衆徒が、春日の神木を奉じて、入京しようと木津川まで押しよせて来ていた。六波羅はこれを宇治で防ごうとした。石清水の神人が春日神人を殺害したからであった。

が、闘いとなるとやはり人殺しの専門家には勝てず、興福寺の衆徒は神木を宇治に遺棄して敗走した。石清水八幡宮寺領山城薪荘と、興福寺領大住荘の水争いがひさしくつづいていて、それが爆発したのだった。

「東国にも武士たちの争いはあったが、幕府の基礎がかたまるに従って、大きな争いはなくなつた。しかし、京はちがうようだ。南都北嶺がことごとくに問題をおこすのは、いまでも昔もすこしも変らない」

親鸞のことは重苦しかった。

東国の弟子から手紙が届いた。それには銭が添えられてあった。親鸞は返事をしたためた。書簡によって教えるということに、親鸞は新しい道をみつけた。

京の中山観音堂の付近で、ひとりの僧が細い瓶を安置して、しきりと祈っていた。

「その中に何がはいっているのか」

ひとびとが集まった。僧はおもむろに向きなおると、うやうやしく頭を垂れて、

「おそれ多いことながら、この細い瓶の中には、行基菩薩のお骨がはいっているのだ」

行基といえば、奈良時代のひとで、十五歳で薬師寺で唯識、瑜伽を学び、都鄙を遊化して、池を掘り堤をきずき、道路を開き橋を架けた。しかし、その行動が僧尼令に反すというので、禁止

された。世間では文殊もんじゆの化身けしんといわれた。聖武天皇の帰依をうけて、東大寺、国分寺の建立に協力した。日本で最初の最高僧階である大僧正をうけたひとであった。

追々と参詣者さんぎが増えるようになった。賽銭さいせんも多くなつた。僧は瓶の中から白骨をとり出してみせた。しかし、白骨には行基であることの確証はなかつた。

「庶民をたぶらかすとは、ふとどきな奴だ」

檢非違使けびいしの役人が来て、細瓶をとりあげ、僧はひつたてられていった。すると、ひとびとはそこにいつとき行基菩薩の遺骨のあつたことも、たちまちわすれてしまった。

鹿肉をくらすことが、一種の流行になつていた。摂政道家の邸やしきの付近に、在京の武士たちが集合するようになった。六角西洞院しよくういんであつた。宍市ししちと称して鹿肉を喰わせていた。

が、これも六波羅の命によって禁止となつた。

隱岐おきに配流中の後鳥羽上皇から、和歌の題が送られて来た。前内大臣源家良、権大納言藤原基家及び従二位藤原家隆らがそれを賜わつて、さっそく歌合うたあわせを行なつた。遠嶋御歌合えんとうおんといわれた。

そのときの歌題は、朝霞あさぐさみ、山桜、郭公ほととぎす、萩露はぎつゆ、夜鹿よしか、時雨しぐれ、忍恋しのぶこい、久恋ひさしこい、羈旅きりよ、山家やまけというのであつた。いわゆる勅題である。自分にはるか遠い島に流されていながら、歌がわすれられず、そこから勅題をおくるというのも風流なことであつた。このときの歌合の顛末てんまつはくわしく隱岐の方に報告された。歌の好きな上皇としては、歌を作ることがせめてものなぐさめであつたらうが、歌を通じて京の臣下と連絡がとりたかつたのであろう。和歌の世界に託して、主上しゆじやうと臣下の心は通いあつた。

親鸞は毎月二十五日、必ず二尊院に出向いた。法然の忌日であつた。黒衣が目につくというので、柿色の法衣を着た。法然の墓にまいるようになってから、親鸞は法然の死の前後のもようをくわしく知りたいと思うようになった。

毎月二十五日には法然の弟子たちが集合して念仏していた。

親鸞が五条西洞院に住んでいることが、追々と浄土宗系のひとびとに知られるようになった。中には、関東における親鸞の布教の実績も伝えきいているものもあつた。

訪ねてくるひとがあつた。それらのひとから親鸞は法然の死のようすを聞いた。

そのころ九州では、法然の高弟の聖光房弁長が然阿良忠というすぐれた弟子を持つことが出来た。聖光といへば、「末代念仏授手印」を創めたひとである。

「わが年たけて、顔齡たれい在世久しからず、屢々しばしば将来を思ふて稍悲傷やを催す」
信頼出来る後継者をもたないことを聖光は嘆いていた。

然阿良忠は、石見三隅いわみすみの生れであつた。京極摂政師実六世の裔すえで、父を円尊といい、叡山東塔えいざんとうた南谷大林房宣雲の弟子であつた。然阿は十一歳のとき、三智法師から「往生要集」の講義をきいて、浄土思想に眼をあけられた。十六歳のとき受戒して、つねに法華を誦持じゆぢしていた。十八歳のとき、「大聖竹林寺記」をひらいて、

「文殊が法照の問に答えて、諸修行門念仏に過ぎたるは無し、西方に阿弥陀あみだぶつ仏在り、彼仏願力不可思議、命終らば決定彼国に往生す」

等の記文を見て、それからは諸行をやめて、日々念仏ばかりを唱えるようになった。

しかし迷いも生じてか、円信や信運しんそんについて天台たいがい俱舎くしゃの両宗をきわめたり、諸所を歴訪して、長楽寺の榮朝や、永平寺の道元にも会い、教外別伝の旨を問うたり、泉涌寺せんゆじょうの俊昶しゅんじやうについて戒律を質ただした。三十四歳、貞永元年（一二三二）本国にかえって多陀寺に腰をすえ、そこにいること数年、嘉禎二年（一二三六）生仏法師というもののすすめで、鎮西ちんせいの聖光を訪ねることになった。聖光はそのころ、筑後上妻莊天福寺にいた。然阿は毎日講筵こうえんに侍した。質疑応答がくりかえされた。聖光は、然阿のただものでないのを知り、法を伝えるにはこのものより他にないと思ひこむようになった。聖光は、浄土宗の法要を伝授し、「末代念仏授手印」を授けることになった。「然りといへどもわが法は悉ことごとく然阿に授けをはりぬ。義道迷ふべからず。法燈いづくん寧ぞ滅ぶべけん。然阿は是れ予の若く成れる也。汝等彼に對して不審を決すべし」と、聖光にはよき後継者が出来た。

然阿は故郷にかえった。安芸あき地方を遊歴すること十年間、ひろく四衆を教化した。親鸞が二十九年ぶりに京にかえつて来たころ、然阿は安芸地方をさかんに遊化していた。

帰京の供をしてきた弟子たちの中で最後までのことっていた教養が、稲田にかえると、顕智けんちが上洛じやうらくしてきた。顕智は岡崎の家から五条西洞院に通った。乗念も上洛した。東国の門弟たちは、東国にあって親鸞の教えを守っているだけでは心細くなるのか、上洛の出来る門弟は親鸞の顔を見ながい道のりをやってきた。顕智は上洛の出来る財力にめぐまれていたが、中には、上洛など思いもよらない弟子があらわれることがあった。道中さぞかし苦労したであろうと親鸞は哀れに思った。

弟子たちがその度に五条西洞院に宿泊するというのではなかった。中には、どこへもいきようのないものもいたが、大ていのもものは京の内ですてを求めて、そこに宿泊して、五条西洞院に顔を出した。上洛の出来るものは、限られていた。

親鸞は、西洞院の住居が稲田のように多くのひとを集めることには神経質になっていた。念仏宗の黒衣の僧が問題にされているのである。黒衣の僧が毎日五条西洞院に集まるのでは、六波羅に刺戟しげきをあたえることになる。

「乗念房は、どちらで厄介になっているのか」と、親鸞が訊いた。

「はい、柳原の身よりのところで世話になっております」

「これからは私が、そちらへ出向こう。そなたに会うだけでなく、これまで縁のなかったひとにも会うことになるだろうから」

門弟たちがつてを求めて世話になっている家に、親鸞はつとめて出かけるようにした。親鸞は、善鸞をつれていった。あるときは吉水よしみづに出向いた。一条、柳原、三条にも出かけていった。顕智に案内されて、岡崎にも出かけた。

「愚管抄」の著者の慈円に、慈鎮しじょうという諡号が贈られたことを親鸞は聞いた。かつて何度も天台宗の座主ざすをつとめた慈円のことを、親鸞は思い出した。九条兼実かねねの弟であり、吉水の法難とくなんのときには、朝廷に対しておかげながら働いてくれたひとであった。親鸞は慈円によって得度とくどしていた。

「源光正という画家が、法然上人の絵伝を描いたという噂うわさでございます」

と、教えてくれた門弟があった。

「それは是非拝見したいものだ。京の画家であろうか」

「いいえ、鎌倉でございます」

門弟に会えば、親鸞の話は稲田時代にかえった。ゆっくりかみしめるように語る。一語もききのがすまいとして門弟は聞いている。善鸞も聞いていた。親鸞はつねに善鸞を意識した。

真仏が上洛したのは、五月であった。親鸞は六十五歳になっていた。顕智が岡崎から真仏を五条西洞院に案内して来た。真仏は親鸞に挨拶をすますと、つづいて筑前に挨拶を行なった。その態度が、ほかの門弟とどこがちがっていた。十七歳のとき親鸞に帰依して弟子となり、真仏の法名をもらったが、以前は真壁の城主であった。下野の国司大夫の判官大内国春の嫡男であり、俗名を権大輔椎尾弥三郎春時といった。親鸞より三十六も年下であり、弟子となって十二、三年経っているが、まだどこやらにかつての城主の鷹揚な、一種の気品を感じさせるものがあつた。善鸞はさっそく紹介されたが、何となく圧迫感をうけた。真仏のことはきいていた。城主であつたというだけで、善鸞は畏敬の念を抱いていた。ほかの弟子たちとは顔つきまでちがっているように見えた。義母や弟たちの態度も、真仏に対するときには、ほかの弟子の場合とちがっているように感じられた。

「私がいなくなつてからの東国の信者のようすを、いろいろと聞いているが、心を痛めている」
親鸞の口調は重苦しかった。

「そのことについても、是非ご報告申し上げねばなりません。信仰の問題が経済的な問題とから